

広汎性発達障害児に対する共同的な遊びの促進と他者を誘う行動の形成に関する検討

○佐野 文美 (東京学芸大学教育学研究科) 井草亜季子 (東京学芸大学教育学研究科) 前川圭一郎 (足立区子ども支援センター) 小笠原 恵 (東京学芸大学)

KEY WORDS: 広汎性発達障害 共同的な活動 誘い行動

【目的】 人間が成長し発達していく上で、人と関わることは必要不可欠なものである。しかし、自閉症児者は人と関わることに困難を示し、一人遊びが多く、他者への積極的な関わりが少ないといわれている。共同遊びは、コミュニケーション行動の発達を促し(伊藤, 2002)、他者とのやりとりを促進する(石原・井上, 2000, 井上・石原, 2000)といった効果が期待される。他者と共同的な遊びをするためには、まず一緒に取り組んでくれる他者を探し、誘うという行動が必要となる。「誘い」行動は、要求充足者とともに活動を共有することで強化されるので、共同的な活動をするための始発行動となる。そして、対象児の実態に合わせたプロンプト刺激や適切な教示を行うなどの共同的な遊びが成立するための設定を十分検討することが必要だといえる。そこで本研究は、広汎性発達障害児 1名に対して、共同的な遊びが成立するための条件として、①共同的な遊びをすることで強化子がもらえる、②2人で行うと労力が少なくなる、③2人で協力して行う、の3条件を設定し、いずれの条件において共同的な遊びがみられるかアセスメントした上で、その条件を含んだ遊びを設定し、他者を誘う行動が生起するか否かを検討することを目的とする。

【方法】 1. 対象児: Y児。2016年4月現在、小学校特別支援学級第6学年に在籍する11歳7カ月の男児。診断名は広汎性発達障害。MA: 4歳0ヵ月、IQ: 35(田中・ビネー知能検査V)、SA: 4歳2ヵ月、SQ: 36(S-M社会生活能力検査)であった。2. 標的行動: 共同的な遊び及び他者を誘う行動。共同的な遊びとは、「他者同ものを介して同じ場で同じ行動をすること」と定義する。3. 指導手続き: (1)アセスメント期(条件交替デザイン): 共同的な遊びが成立するための条件として設定した、①共同的な遊びをすることで強化子がもらえる、②2人で行うと労力が少なくなる、③2人で協力して行う、の3条件のどの条件を用いたときが、Y児の共同的な遊びがみられるか調べることを目的とした。条件①では、2本の紐をY児とセラピスト(以下、Thとする)が同時に引っ張ると箱が開き、強化子を手に入れることができる赤い箱の活動、一緒に箱を運ぶことができたなら、Y児が好きなお絵かきをすることができる大きい宝箱の活動を設定した。条件②では、2人で分担して、折り紙で手裏剣を折る活動、レゴで花をつくる活動を設定した。条件③では、2人で協力して大きい折り紙を折る活動、大きいシャボン玉をつくる活動を設定した。(2)ベースライン期(以下、BL期とする): アセスメント期で行った3条件のうち、共同的な遊びの生起率が最も高かった条件②と条件③を用いて、他者を誘う行動が生起するか否かを観察することを目的とした。(3)介入期: 共同的な遊びに他者を誘う行動を形成することを目的とした。4. 分析方法: 共同的な遊びの生起率、他者を誘う行動の生起率を算出した。5. 信頼性: Thと指導に関与していない他の観察者との一致率は94%であった。

【結果】 共同的な遊びの生起率を図1に、他者を誘う行動の生起率を図2に示した。

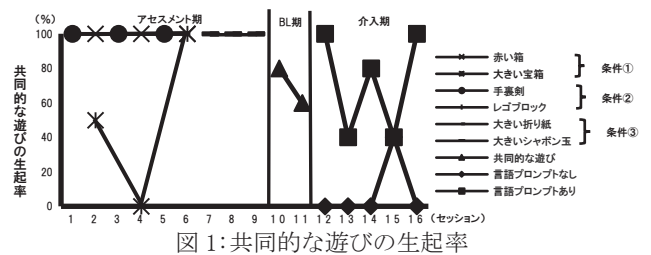


図1: 共同的な遊びの生起率

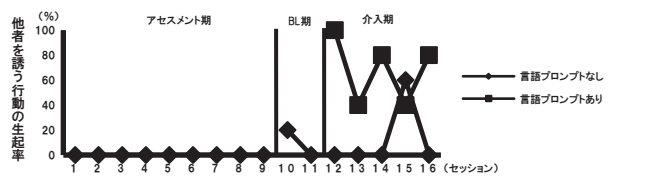


図2: 他者を誘う行動の生起率

【考察】 1) 共同的な活動について(1) 共同的な遊びの生起: アセスメント期において、Thが活動のできる場所で待つ設定は、共同的な遊びが生起しやすいものであった。介入期において、他者を誘うプロンプトが共同的な遊びを促進させることに有効であった。(2) 共同的な遊びがみられる条件の検討: 3条件の比較の結果、条件②と条件③において、共同的な遊びの生起率が高かった。この条件間の違いには、強化を受けるまでの時間間隔が影響している可能性がある。さらに、共同的遊びの生起には、付加的強化子を用いるのではなく、遊びそのものが強化価の高いものを用いることが有効であることが示唆される。また、介入期に入り、Thが使用する道具から一定距離離れ、誘われるのを待つ設定にすると、自発的な共同的な遊びの生起率は低減した一方、Thが道具のそばにいたBL期においては、自発的な共同的な遊びはみられた。このことから、共同的な遊びの自発生起には、使う道具のそばに共同的な遊びを行う人がいることが弁別刺激となっていた可能性がある。2) 他者を誘う行動の生起: 言語プロンプトを呈示した場合には高い確率で「誘い」行動がみられたことから、「2人でやると〇〇ができるよ」一言語プロンプト「誘い」行動一強化という随伴性が成立していた可能性がある。

【結論】 アセスメント期において、共同的な遊びの自発生起率の高かった条件を用いて「誘い」行動の形成を図ったが、共同的な遊びが成立しただけでは「誘い」行動の自発には至らなかったといえる。また、条件や活動の検討や、共同的な遊びを行う相手を複数にする等、般化を促進するための検討を行うことが課題である。

【文献】 1) 井上雅彦・石原真実(2000) 軽度発達障害幼児における集団参加支援(2), 日本特殊教育学会第38回大会発表論文集, 386. 2) 石原真実・井上雅彦(2000) 軽度発達障害幼児における集団参加支援(1), 日本特殊教育学会第38回大会発表論文集, 385. 3) 伊藤良子(2002) 自閉症児の遊びとコミュニケーション. 発達, 92, 23-29.

※なお対象児の保護者の承諾を得て研究に協力いただいた。
(SANO Ayami, IGUSA Akiko, MAEKAWA Keiichiro, OGASAHARA Kei)